

■ 〈ニューヨークのため息〉に捧げた名手テッド・ローゼンタールの最新ピアノ・トリオ。

2006年9月に発表された『組曲 王様と私より』(TKCV35378)で改めて注目を集めたテッド・ローゼンタール (1959～) の、ヴィーナス第2弾となる最新録音が届いた。今回は、日本で根強い人気を誇る大歌手ヘレン・メリル (1930～) に捧げられた彼女の愛唱曲集である。

ご存知のようにテッドはヘレン・メリルの伴奏者としてこれまでに何度も日本を訪れている。ヘレンの歌や音楽性、レパートリーを知り尽くしたテッドが、自分のピアノ・トリオで、ヘレンのレパートリーを演奏すると、いったいどんな音楽が生まれるのだろうか――そのあたりが多くのリスナーが期待する点であり、本作の聴きどころといえる。

本書を書くにあたって、テッドに行った最新インタビューから早速ご紹介したい。

――ヘレンとの共演は、いつから始まったのですか？

テッド (以下T R) : 1996年。ほとんどが日本での公演だ。いちばん最初のツアーはアート・ファーマーがいっしょだったので、よく覚えているよ。

――これまでヘレンと行った日本ツアーの回数は？

T R : 10回くらいだ。普段は私(p)、ジョージ・ムラーツ(b)、テリー・クラーク(ds)のトリオが基本。彼らが忙しう時には、スティヴ・ラスビナ(b)、ショーン・スミス(b)、エリオット・ジグモンド(ds)が代役を務めることもある。

――今回のアルバムが生まれるまでの経緯を教えてください。

T R : そもそも私は、自分のアルバムを作る場合に、何か具体的なテーマを決めてから取り組むのが好きだ。ヴィーナスでの1作目『組曲 王様と私より』では、私のアイデアが採用され、同名ミュージカル『王様と私』で使われた音楽を取り上げた。このミュージカルではたくさんの名曲が残され、それらを組曲のように表現できれば面白いものになると考えたからだ。

――なるほど。今回のアルバムも、「ヘレン・メリル愛唱曲集」というテーマが具体的に決まっているので、まさにあなた好みの企画だったわけですね。

T R : そうだ。でも、今回は私のアイデアではなく、原さん (ヴィーナスのプロデューサー) の提案なんだ。ヘレンがステージで歌う楽曲は、ほとんどがスタンダードと呼ばれているもので、それらは今でも多くのジャズ器楽奏者が演奏している。私の視点で、彼女が歌ってきた素晴らしい楽曲を組み合わせれば、おのずと面白い作品ができるだろう、と思ったよ。

――共演者について教えてください。ベースのジョージ・ムラーツはヘレンのレギュラー・バンドや、ヴィーナスの録音でもお馴染みの名手ですから説明不要でしょう。ドラムのアル・フォスターについてはどんな印象をお持ちですか。

T R : 今回彼と共演できて、非常に光栄に感じている。心地よくスイングする、素晴らしい音楽性と繊細な感受性をもった偉大なドラマーだと思う。

\*

「歌手や器楽奏者が作った作曲家別作品集」は星の数ほどあるが、「有名歌手の伴奏者だったピアニストが、その歌手に捧げたアルバム」を作った例となると、その数は激減する。思いつくところでは、トミー・フラナガンがエラ・フィッツジェラルドに捧げた『Lady Be Good For Ella』(1993年)、ラルフ・シャロンがトニー・ベネットに捧げた『Music For The Late Hours』(1965年)、来日中のロネル・ブライトが、急遽日本でライブ録音した『サラ・ヴォーンに捧ぐ』(1990年) などだ。その点でも、テッドが残したこのアルバムは「ありそうでなかった企画」である。

■ヘレン・メリル紹介

本名Jelena Ana Milcetic。1930年7月21日ニューヨーク生まれ。両親はクロアチアからの移民(ジョージ・ムラーツとは民族的に同じ血統)。ハイスクール時代からニューヨークの『The 845 Club』でプロ活動を開始。マイルス・デイヴィスやディジー・ガレスピー、パド・パウエル、オスカー・ペティフォードと同じビバップの洗礼を受けた。デビュー当初は「ヘレン・ミルケティッシュ」と名乗っていたが、のちに「ヘレン・メリル」に改名。1953年にルース・レバールに初録音し、翌年からマッキーラーの専属歌手となって、クリフォード・ブラウン、クインシー・ジョーンズ、ビル・エヴァンスらと共演、次々と名作を残す。60年代後半からしばらくの間、日本に滞在した時期があり、親日家のジャズ歌手としても知られている。

彼女の名前を日本のファンに知らしめたのが、1954年のクリスマス・イヴにクインシー・ジョーンズ、クリフォード・ブラウンらと録音したアルバムだ。原題は『Helen Merrill』とシンプルだが、日本では「ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン」というアルバム名で通っている。ジャズの名盤ガイドには必ず出てくる1枚だ。そのアルバムには『Don't Explain』『You'd be so nice to come home to』『What's new』『Falling in love with love』『Yesterdays』『Born to be blue』『S Wonderful』の7曲が収録されており、なかでも『You'd be so nice to come home to』は、彼女の代名詞となった1曲。このアルバムから、今回テッドは4曲取り上げており、改めて人気の高さをうかがわせる。自己のホームページ (http://www.helenmerrill.com/) に彼女の詳しい経歴が掲載されている。

■テッド・ローゼンタール紹介

本名Theodore Marcus Rosenthal。1959年11月15日、ニューヨーク州グリーンネック生まれの48歳。妹がアマチュアのバイオリン奏者。6歳から12歳までロックを演奏、その後ジャズに転向。12歳でトニー・アレス(p)に師事。ハイスクール時代にはクラシック音楽に興味を持った。その後マンハッタン音楽院で学び、マニー・アルバム、ボブ・ブルックマイヤー、メイヤー・カフベルマンにアレンジを師事。1988年、第2回セロニアス・モンク・コンペティション (ピアノ部門) で優勝し、ジェイ・レオンハート(b)と共演。1991年ジョー・ロッシアーノのビッグバンドに参加。1992年にはジョン・ファデイス、ジェリー・マリガンと共演するとともに、自己のトリオカルテットによる活動を開始。現在は演奏活動のほか、ジュリアードと母校マンハッタン音楽院で教鞭をとる。妻は弁護士で、プロのバイオリン奏者。敬愛するミュージシャンとして、アート・テイタム、パド・パウエル、ハービー・ハンコックの名前を挙げている。これまでヴィーナス、ケンミュージック、CTI、コンコード、ブレイスケープなど複数のレーベルから10枚のリーダー作をリ

## My Funny Valentine

### マイ・ファニー・バレンタイン〜トリビュート・トゥ・ヘレン・メリル〜Ted Rosenthal Trio

テッド・ローゼンタール・トリオ

### 1. ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ You'd Be So Nice To Come Home To 〈 C. Porter 〉 ( 6 : 41 )

### 2. マイ・ファニー・バレンタイン My Funny Valentine 〈 R. Rodgers 〉 ( 6 : 37 )

### 3. アローン・トゥゲザー Alone Together 〈 A. Schwartz 〉 ( 5 : 10 )

### 4. ラバー・マン Lover Man 〈 R. Ramirez, J. Sherman 〉 ( 6 : 53 )

### 5. 朝日のようにさわやかに Softly As In A Morning Sunrise 〈 S. Romberg 〉 ( 8 : 21 )

### 6. ドント・エクスプレイン Don't Explain 〈 B.Holiday 〉 ( 6 : 42 )

### 7. 枯葉 Autumn Leaves 〈 J. Kosma 〉 ( 4 : 23 )

### 8. アイ・フォール・イン・ラブ・トゥ・イージーリー I Fall In Love Too Easily 〈 J. Styne 〉 ( 7 : 12 )

### 9. サマータイム Summertime 〈 G. Gershwin 〉 ( 6 : 17 )

### 10. 恋に恋して Falling In Love With Love 〈 R. Rodgers 〉 ( 7 : 06 )

### 11. スワンダフル 'S Wonderful 〈 G. Gershwin 〉 ( 3 : 29 )

### テッド・ローゼンタール Ted Rosenthal 〈 piano 〉 ジョージ・ムラツ George Mraz 〈 bass 〉 アル・フォスター Al Foster 〈 drums 〉

### 録音 : 2007年6月5、6日 ザ・スタジオ、 ニューヨーク

### © 2008 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

### Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan Recorded at The Studio in New York on June 5 & 6, 2007 Engineered by Katherine Miller Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara

### Front Cover : © The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo Artist Photos : Mary Jane Photography Designed by Taz

### This Recording is dedicated to Helen Merrill

ース。自己のホームページ (http://www.tedrosenthal.com/) に詳しいディスコグラフィーを掲載している。

■演奏曲目について

1.You'd be So Nice To Come Home To

日本公演でヘレン・メリルが必ず歌う名曲中の名曲。作詩・作曲コール・ポーターで1942年の映画『Something to Shout About』で歌われた。映画自体はまったくヒットしなかったが、この曲だけが人々の記憶に残った。その理由は、当時のアメリカは第2次世界大戦中だったため、家族や恋人と離れた兵士がたくさんいたこともあり、大衆から支持されたと思われる。歌詞の大意は『君が待っている家に帰れたら、ほくはどんなに素敵だろう』という内容。クリフォード・ブラウンとの共演作と同じイントロをピアノがテーマを弾き、そのままピアノ・ソロで2コーラス。テッドのピアノは、ブロック・コードとシングル・トーンをバランスよく使い分け心地よくスイングする。続いてベース・ソロが1コーラス、ドラムとピアノのバース・チェンジで1コーラスを経てラスト・テーマに。最後の16小節で転調する(仕掛け)を用意するところも、オ人テッドらしい。ミディアム・スイングのテンポでどっしりと重心の座った、オープニングにふさわしい演奏だ。

2.My Funny Valentine

今度は対照的な繊細なバラード。ロジャースーハートの名コンビによる1937年のミュージカル『Babes in Arms』からのナンバー。フランク・シナトラやチェット・ベイカーの歌でも有名だ。テッドはエディ・ギンズのようにヴァースから入らず、短いイントロからすぐテーマに入る。一音一音を心をこめ、隙間を大切にしたアプローチで実に気持ちよい。和音の美しさ、輝きはビル・チャーラップに通じる。最初のテーマをゆったり弾いた後、ピアノとベースが絶妙の絡みあいをみせながら進行していく。ピアノを聴きながら、得意即射のレスポンスを入れていくムラーツの天才ぶりにも注目したい。まさにテッドの独壇場、思わず息を呑む。こぼれ落ちるようなロマンティシズムの名演だ。ヘレンはこの曲を1968年にロン・カーターとの共演作『A Shade Of Difference』(Milestone)で録音している。

3.Alone Together

ハワード・ディーツ作詞、アーサー・シュワルツ作曲による1932年の作品。同年のミュージカル『フライング・カラーズ』のために書かれた。歌詞の大意は「ぼくたちの愛は、どんな海よりも深く、どんな愛よりも偉大だ。君と2人きりでいられるなら、ぼくたちはどんな苦労にも耐えていけるだろう」という内容。最初は短調ではじまり、徐々に長調に移行するというコード進行も斬新だ。変則な構成をもつA(14)A(14)B(8)C(8)の44小節。イントロは怪奇映画のようだが、すぐにイン・テンポに移り、お馴染みのテーマを演奏されていく。ムラーツがすぐにテッドに追従する。

テーマの後、ベース・ソロに入り最初の28小節まで、サビはピアノがとる。次はピアノ・ソロが1コーラス、ドラム・ソロは最初の28小節まで、サビは再びピアノをとる。その後すぐラスト・テーマでの8小節のみ、エンディングに入る。無駄のない構成だ。ヘレンは1954年、ジョニー・リチャーズ楽団の伴奏で録音した1曲。

4.Lover Man

ジム・デイヴィス、ロジャー・ラム・ラミレッツ、ジミー・シャーマンの共作による1942年の作品。ヘレン・メリルにも影響を与えたビリー・ホリデイの歌唱や、チャーリー・パーカーの演奏でも有名な1曲だ。歌詞の内容は「なぜかわからないけどひどい気分。いままでしたことのないことをやってみたい。わたしの愛する人はどこにいるの。夜は寒く、ひとりぼっち。空にはお月様があるけれど、わたしを愛してくれる人はいない」という失恋の歌。テッドはブルース・フィーリングたっぷりのスロー・バラードとして演奏。ソロはテッドが先発、インテンポに移り、鮮やかなシングル・トーンを中心にブルージーなソロを聴かせていく。サビからスイングの4ビートに入り、サビはベースにソロを任せる。この高音域を駆使したムラーツのソロが秀逸で、わずか8小節なのに強烈な印象を与える。この曲をヘレンは、ロン・カーターとのデュオ(1988年)やテディ・ウィルソンとの共演盤(1970年)でも取り上げている。

5.Softly As In A Morning Sunrise

ヘレンの歌はもちろん、ソニー・クラークやウィントン・ケリー、MJQの演奏で有名な1曲。形式はA(8)A(8)B(8)A(8)32小節。オスカー・ハマーシュタイン2世とジグムンド・ロンバークのコンビによる作品で、1928年のオペラック『ザ・ニュー・ムーン』で取り上げられた。ベースがホレス・シルヴァーの曲のようなエキゾチックなパターンを刻み、ドラムが8ビートのラテン・リズムを提示した後、ピアノが登場、ブロック・コードでテーマを弾いて、カラーの違いを打ち出している。サビのみ4ビートになり、再びラストAで8ビートに。ピアノのソロは3コーラス。スイング・テンポで軽快に進行していく。鍵盤の上を軽やかに舞う指の動き、コーラスごとにメリハリをつける構成のうまさにも注目したい。続いてベースが2コーラス。2コーラス目のサビに一番のクライマックスをもっていく。その後のドラムとピアノのバース・チェンジで1コーラス半。サビからラスト・テーマに戻り、ラスト8小節で最初のリズム・パターンに戻る。ヘレン1957年の代表作『The Nearness Of You』に収録されていたレパートリー。

6.Don't Explain

アーサー・ハーツォグ・ジュニア作詞、ビリー・ホリデイ作曲による1946年の作品。ビリー・ホリデイが、当時の夫ジミー・モンローとの間で起こった出来事をモチーフにしたものといわれる。A(8)A(8)B(8)A(8)の32小節。イントロ8小節に続いて、スロー・テンポでテッドのピアノがメロディを歌い上げていく。特にサビからの解釈は聴く者の心にくっと語りかける。ソロはピアノが先発、まるで歌詞が聞こえてくるような繊細さ。そのテッドに輪をかけて素晴らしいのが、サビからのムラーツのソロ!わずか8小節なのに、なぜこんなにも印象に残るのか。ラストAの8小節からエンディングに。こちらもちよい名演。

7.Autum Leaves

1945年、ジョセフ・コスマが作曲、脚本家で詩人のジャック・プレヴェールが作詞。映画「夜の間」でイヴ・モンタンが歌った。英語の歌詞をジョニー・マーサーがけたのが1950年。ジャズ・スタンダードの代名詞としてお馴染みのこの曲にテッドは「真つ向勝負」を挑む。8ビートのリズム・パターンのイントロに続き、アップ・テンポでぐんぐんスイングする。ファースト・テーマを軽く演奏した後、ソロはピアノが先発で3コーラス、文句なしの名演だ。続くベースも2コーラス、そのまま勢いに乗ってピアノがラスト・テーマに。再びイントロのリズム・パターンを2回繰り返して、スカッと締めくくる。ヘレンは日本滞在時の1967年に録音した『Autumn Love』や先述のロン・カーターとの共演作でも取り上げている。

8.I Fall in Love Too Easily

サミー・カーン作詩、ジュール・スタイン作曲による1945年の映画『鑑をあげて』で使われたナンバー。ヘレン・メリルだけでなく、フランク・シナトラやチェット・ベイカーの歌でも有名な1曲だ。スロー・バラードとしてテーマを演奏、そのままピアノ・ソロに。2コーラス目からミディアム・テンポでスイングする。後半はベース・ソロで1コーラス、再びミディアム・テンポで16小節、ラスト16小節でテンポを落とし、最初と同じスロー・テンポに戻る。ヘレンは先述のロン・カーターとの共演作で取り上げている。

9.Summertime

1935年、ガーシュインの黒人オペラ『ボーギー&ベス』のオープニングを飾った名曲中の名曲。まずはテッドが奏でる重厚な左手のリズム・パターンに注目。ドラムもマレットを使っている。ミディアム・テンポのスインガーとして演奏、ベース・ソロを大きくフィーチャーした後、ピアノ・ソロに。ラスト・テーマでさりげなく転調しているのも心憎い。ヘレンは1957年の代表作『The Nearness Of You』やギル・エヴァンスとの再会盤『Collaboration』でも取り上げた。

10.Falling in Love with Love

ロジャース＝ハートのコンビによる1938年のミュージカル『シラキユースから来た男たち』からのナンバー。歌詞は「恋に恋するとは、夢中で信じること。恋に恋するとは愚か者の遊び。若きゆえの空想か、小学生向けのお話みたいなもの。ある満月の夜、わたしは恋に恋をしてしまった。愚かなことに盲目だった。永遠に続く愛に、恋をした。でもその愛は、わたしから消えてしまった」という内容。A1(16)A2(16) 32小節。小粋なイントロ8小節を経て、ミディアム・テンポで軽快にスイングしていく。ロン・ソロとベース・ソロがそれぞれ3コーラス。ドラムスとの4バース・チェンジで1コーラス。こういう『普通』の演奏が、いちばん実力が出る。

11.S Wonderful

アルバム最後のガーシュイン兄弟の作によるアップ・テンポのスインガー。1927年のミュージカル『ファニー・フェイス』からのナンバー。ビル・チャーラップがビーター&ケニーのワシントンズと組んだヴィーナス第1弾『ス・ワンダフル』も、かなりの名演だったが、ローゼンタールムラーツフォスターによるこの演奏もなかなかの好演とみた。流麗なピアノ・ソロは3コーラス。続いてドラムスとのバース・チェンジの入り1コーラス。

【2007年12月　後藤　誠/Makoto Gotoh(http://riffide.exblog.jp)】